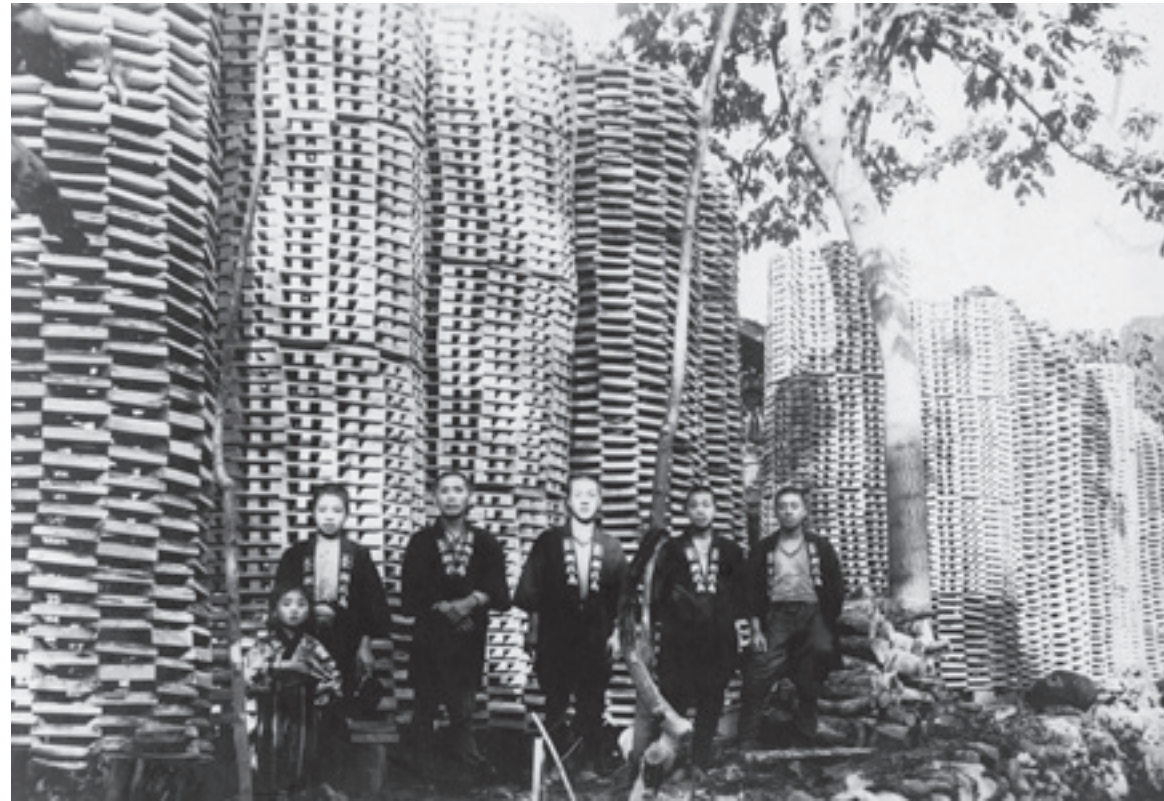


村の男の仕事と女の仕事

編集：原田健一
テキスト：榎本千賀子

男の仕事

金山町は総面積の90%が森林で、冬の豪雪がもたらす莫大な水資源と、山菜や茸、国内最高級と言われる会津桐、本名杉・三条杉などと呼ばれる杉の良材、漆などの多彩な森林資源に恵まれた町である。町内の各村々はこれらの資源を、伝統的な手仕事と折々の新技術を組み合わせながら、自らの暮らしへと活用してきた。また、大正期に只見川での筏流しで杉材の出荷が始まった新潟や、桐下駄の一大消費地であった東京をはじめ、国内外の広い地域との経済交流が行われていった。



乾燥中の桐下駄材と水井桐材店の職人たち 金山町・大志 1935年頃



川口・越尾商店増築時の移動製材現場 動力には外車のエンジンを流用した 金山町・場所不明 1936年 / 川口を起点に新潟への物流に従事した山内運輸部の車 金山町・川口 昭和10年代 / 国策縮羊の導入 金山町・川口 1937年



親戚一同でのホップ摘花 作業量に応じて各自に賃金が支払われた 金山町・川口 1960～1965年頃 / 手作業による田植え 金山町・川口 昭和30年代 / 橋脚コンクリート用の砂利採取 金山町・玉梨 1933年頃



金山町の男女が多く農業技術を身につけた会津山村道場での「ホームスパン講習会」 南会津町・会津田島 1942年

女の仕事

山間部の暮らしには、治水をはじめとする様々な土木事業や、狭小な傾斜地での耕作など、厳しい肉体労働と技術、そして知恵が必要とされる。金山町に残る写真からは、この町の男女が、複雑な分業のもとに様々な試行錯誤を行い、ともに暮らしを切り開いてきた姿が見えてくる。男たちが山林の資源を獲得し、その加工や運搬に奮闘するあいだ、女たちもまた、自らの肉体を酷使して橋脚の建設や道路、溜池作りなどの村内のインフラ整備にあたり、農作業に精を出し、遠方に出向いて産物をよりよく活かすための技術を学ぶなど、力を尽くしていた。